〈１９９５年度特定研究〉
中・高等学校における心身の諸問題とその対応

研究の経過

1995（平成７）年度の特定研究のテーマは「中・高等学校における心身の諸問題の実態とその対応」というもので、研究代表者は武藤芳照教授であった。

このテーマについて教育行政学ないし学校経営学の面からの参加を求められた私（浦野東洋一）は、白畑豊、塩野谷斉、小幡啓靖、小金丸美香の四氏に研究への協力を依頼し、プロジェクト・チームを発足させて、共同研究を進めてきた。

私どもが企画し、実施した調査研究は、次のとおりである。

1　まずは、今日の青少年の学校や家庭での生活や進路意識についてリアルな認識を持つ必要があることから、都内の高校生に対するアンケート調査を企画し、実施した。これは、塩野谷、小金丸両氏の協力をえて、主として浦野が中心となり、「高校生の学習と生活、進路に関する意識調査」というタイトルのアンケート票を作成し、実施したものである。

アンケート結果の集計は、Ａ４判で87頁に及ぶ統計表と図表として完成しているが、現時点では、その分析と考察（文章化）が完成していないので、本紀要に掲載することはできない。これはひとえに私の時間的制約のためであり、関係者におわびするとともに、近く別の機会を期するものである。

2　次に、いじめ自殺事件からもうかがえるように、今日多くの中学校が深刻な問題をかかえていることに注目せざるをえなかった。そこで、農村部にある「荒れた中学校」がいかにして再建されたかを実証的に明らかにし、そこから教訓を導き出せないであろうか、ということになった。この調査研究には主として小幡氏があたった。本紀要掲載の小幡論文は、その研究成果の一部である。

3　最後に、再び高校に目を転ずると、「教育困難校」とか「底辺校」とか「課題集中校」というような言葉がしばしばとびかうように、高校教育もまた深刻な問題をかかえており、他方で文部省主導の高校教育改革も進行している。そこで、県レベルの規模で、県の教育行政との関連において、何故「教育困難校」は生まれるのか、いかにしたら是正できるのかを実態調査により解明してみようということになった。この調査研究には主として白畑氏があたり、Ａ４判83頁に及ぶ研究報告書が提出されている。本紀要の紙幅の関係から、本紀要掲載の白畑論文は、その要旨である。

私どものこれからの課題は、この３本の調査研究の結果をもとに共同討議を重ね、「中・高等学校における心身の諸問題とその対応」について、教育行政学ないし学校経営学の面からの最終まとめを作成することである。

1996年２月
浦野　東洋一